



基礎学問の資格は何か

米田 英一

(元 (株) 東芝)

eyoneda@par.odn.ne.jp

12月号の本欄に載った川合さんのエッセイ「伝統的基礎学問」は非常に啓発的であった。しかし気になったことも多い。最初に処理対象の個数に関する「量から質への転化」の話がある。かっこ内はEngelsの「自然の弁証法」に登場する有名な言葉だが、Engelsのそれは川合さんのいう「量から質への転化」とは異なる。Engelsには「非常に多い」という概念はない。「情報万歳」といいたいところだが、物理でいう巨視的と微視的という概念は「非常に多い」という概念を含む、より本質的な「量から質への転化」の例である。情報が物理を押し退けることは困難であろう。

川合さんの言われる情報とは、計算機科学だけではなくはるかに広い範囲を包含する知的営為としての情報学を意味しているのだろうと想像する。計算機科学そのものでは、これを高校の科目に採り入れることに対して電気工学や機械工学などから苦情が出るであろうからである。然らば、その情報学は理科系の範囲にとどまるものなのか。この場合に気になることは、理科系情報学のメトリックや単位系は何かということである。基本単位として秒とピット以外に何があるのだろうか。データの件数だといわれそうだが、件数は果たしてSI単位系の一員たり得るか。物理では、単位系、次元、数のオーダー(10の何乗)という概念を学ぶことができる。情報ではどうか。

それとも川合さんのいう情報とは、情報の社会的意味付けという、単位系などを云々できないような広大な領域を指しているのだろうか。このあたり、無学な私が知らないだけなのかもしれないが、情報の偉い学者には、朝永振一郎博士の遺著「物理学とは何だろうか」の向うを張って、ぜひとも「情報学とは何だろうか」という一般知識層向けの書物を著わしてほしいものである。

情報が基礎学問を標榜するためには、これは絶対的な必要条件だと考える。

ところで、川合さんの論考では触れられていないが、高校の科目の数には制限がある。情報を科目として参入させれば旧来の科目の何かを追放しなければならない。追放する基礎的学問は何だろうか。それとも追放の対象は基礎的学問ならぬ体育や美術・音楽などの芸術科目なのだろうか。

川合さんは「情報」の中心的課題として現実世界のモデル化とモデルの解釈を挙げておられる。非常に適切であると思う。しかし、そのためにはまず現実世界をよく知っていることが必要である。物理でいう力・速度・質量などに見るモデル化が幼児期からの身体的体験を基礎にできるのに対して、情報でいう「現実世界のモデル化」は、より深い人生経験・社会的経験を必要とするはずである。十分な経験なしのモデル化は空虚なお遊びに終わる危険性が高い。情報に関する教育は大学に入ってからでも遅くないとはいえまいか。

最後に情報の先生方の社会に対する発言や姿勢について苦言を呈したい。新参者の情報が伝統的基礎学問に並んで(それ以上に)学校教育において確固たる地位を占めるには、情報が社会から認知され尊敬される必要がある。現実はどうか。数学の場合は、上野健爾さんの数々のエッセイや著作、岡部恒治さん他の「分数ができない大学生」など、数学の重要性について一般社会相手に大キャンペーンをやってきた。その結果が最近の指導要領の見直しにつながったのだと思う。情報の先生方は何をやったか。

倫理問題についても同様である。たとえばマイナスイオン発生装置の「1.5m離れた場所で1cm³当たり5,000個ものマイナスイオン」といったAvogadro数を無視した無知蒙昧な宣伝文句に対して、「これは情報にかかわる詐欺でもある」として色々な場で糾弾するのが情報の学者の責務である。もちろん、化学の学者の責務でもある。また、計算機や情報システムの世界には情報関連企業の誇大広告的な愚かなテレビコマーシャルなど胡散臭いものが非常に多い。ケータイ感溺の愚かさはいまでもない。こういう現象に対して目を閉じ口を噤んでいるようでは、情報が数学や物理よりも尊敬されるようになることはない。情報の先生方にはもっと社会を向いて積極的に発言してほしい。

(平成16年2月9日受付)